

子宮がん検診を受けよう

今回は子宮がん検診のお話をしましょう。

女性がかかるがんのうち、子宮がんは罹患数(=病気になった人の数)は、約2万6千人で第5位。残念ながらお亡くなりになる死亡数は約6400人で8位です(日本対がん協会ホームページより)。罹患数5位で死亡数8位の違いは、子宮がんは早期発見すれば比較的治療可能であることを意味します。

最近、テレビや週刊誌でいろいろな主張も見られますが、がん治療の根本は相変わらず早期発見・早期治療であると断言します。



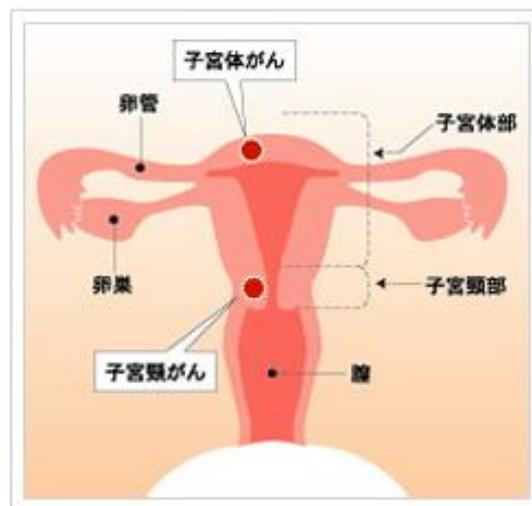
子宮がん、とりわけ子宮頸がんは、検診の効果が高いといわれています。欧米の教科書には、(進行した)子宮頸がんの多くが、検診を受けていない女性にみられると書かれているほどです。

一方、検診が大事なのはわかるけど忙しいし、そのうえどんなことをするのか心配ではありませんか？

昔から産婦人科は受診しづらいですね。まずは診察台にのらなくてはなりません。でも、最近の診察台は床屋さんや歯医者さんと同じで自動化が進み、デザインも工夫されています。検診対象となる子宮頸部は膣の奥にあるので、腔鏡という産婦人科特有の診察器具を用います。手のひら大でカモのくちばしのような恰好で滑らかにできています。子宮頸部の、膣に出っ張った部分をとくに子宮腔部といいます。この表面を綿棒や柔らかい樹脂製のブラシでこすると、子宮頸部の細胞が採取できるのです。

次に膣内の触診(内診)を行います。子宮の大きさ、形、向き、硬さなどを感触で評価します。腔鏡の診察が乗り切れれば内診は問題ないです。ここまでものの1~2分です。

追加として、経膣超音波検査を行います。内診を視覚化した検査で、子宮内膜、子宮筋腫や卵巣の様子など、多くの情報を得ることができます。追加料金が必要で恐縮ですが、子宮体がん検査を安全に行うためにも役立つので、ぜひお勧めしたい検査です。子宮体がん検査は、子宮頸部からさらに奥の子宮体部まで細いブラシ状の検査器具を到達させる必要があるため、多少刺激があります。6カ月以内に不正出血のあった方、50歳以上の方にご希望で行う検査です。



【産婦人科診療部長 鏡 一成】

